

---

# 魔王様の側近 B

十日月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王様の側近B

### 【Nコード】

N1176M

### 【作者名】

十日月

### 【あらすじ】

あたしは魔王様の側近Bだ。その2でも女の方、でも良い。でも魔王様の女といわれるととりあえず半殺すことにしている。

そんな彼女と魔王城の皆さまの何やかやな話。時々勇者も。

## 側近Bと側近A

あたしは魔王様の側近Bだ。その2でも女の方、でも良い。でも魔王様の女といわれるととりあえず半殺すことにしている。そんなの魔王様に失礼だろうが。

今日もそんな阿呆を一匹、ずるずる引きずって長い長い石柱の廊下を歩いていた。なめらかで光沢のある廊下はあまり音を立てない。

「メイ、お疲れ」

「ユーディット」

振り返ると、や、と片手をあげて挨拶する男がひとり。

側近A、側近その1、男の方、と呼ばれても良いはずなのに絶対に『ユーディット様』としか呼ばれない、側近仲間の男だった。

恐れられてるのだ。反対にあたしは舐められてるから名前は滅多に呼ばれない。

にこやかなユーディットに何となくイラツとして顔をしかめた。

「なんでここに居るの。魔王様のお側に控えてないで何かあったらどうするの」

側近は2人しか居ないのだ。なのに側近Bは雑魚締め、側近Aは散歩では何かあった時対処ができない。

不満をぶつけるとユーディットはくすくすと笑った。

「あの方はお強いから何かあっても大丈夫だよ」

当たり前だ。魔王様は魔物を統べる世界最強のお方であることに一辺の疑いの余地もない。

とはいえもし万が一勇者が紛れ込んでいて、魔王様一人で倒してしまつては側近がいる意味がないじゃないか。

それに、だ。

「何を言う。魔王様の喉が乾いてしまつたら誰が水を用意するの。眠つてしまわれたら誰が毛布をおかけする。体調を崩されたら大変

なことでしょう!」

最近は勇者の活動も活発化してきているので、中等位のダンジョンが良く壊滅される。そのせいで魔物の入れ替えやダンジョンの修復の指示などで、魔王様はご多忙なのだ。

ご負担を少しでも軽くして差し上げるのが側近としての務めだろうに!

だが、ユーディットは苦笑する。いらつとした。何か言いそつに唇がもごもごしたのに、何も言わずに弧を描くのだ。ほろ苦い笑みを浮かべても品が良いのは崩れない。そんなことにもいらつとする。

「メイ、魔王様がお呼びだよ」

「なんでそれを早く言わないのよ!」

さげんだ。ゴツンと音がした。下を見るとさっきまで引きずっていた阿呆が、石柱の床に半分埋まって死にかけていた。

まあいいかと思った。

「すぐに参ります魔王様!」

はたはたとマントを翻して駆け出すと、ユーディットが後ろでくつくつ笑っているのが分かった。

でももう気にしない。

「ユーディット、ソレを医務院に運んで、床直しておいてね!」

置きみやげに仕事を押しつける。

あたしは魔王様の側近B。その2でも女の方でも好きに呼んで構わない。

でも左腕って呼んでくれたら、結構嬉しい。

## 側近 B と治療院

あたしは魔王様の側近 B だ。その 2 でも女の方、でも良い。でも魔王様の女といわれるととりあえず半殺すことにしている。

という訳で今日も今日とて、禁句を叫んだ阿呆を引きずっていた。石柱の廊下は白い石で出来ていて、滑らかで艶やかで涼しく、綺麗な中庭に面している。

その中庭の上を、ずるずると阿呆を運ぶ。散策のための庭石や景観のための金属植が生えているから時々引つかかって、ぐふっ、と呻いていた。けれどどうせ半殺し済みなのだし、ひとつやふたつ傷が増えたところで大した違いは無いだろうと思う。

前回石柱の廊下に穴をあけたから、あとであたしが直さなければならなくて大変だったのだ。

本来なら何も言わなくてもゴーレムやドワーフがやってくれるのだが、今はダンジョンの工事に出払っていて人手不足。魔王様の部屋からの帰り道、「出来るんだからやってね」とユーディットに押し付けられて渋々やった。

確かに、城に傷がついたままなんて魔王の名誉のためにもあってはならないことなのだ。

だから今回からは廊下を使わず、外を引きずることに決めたのだ。

それにしても、治療院は何でこんなに遠いんだろう。ようやく長い長い廊下を渡りきって、治療院へついた。

「タランテ、いる？」

「いるわ」

入口から声をかけると、奥からすらりとした白衣の女、タランテが出てきた。黒い縁の眼鏡を掛けて、灰色の髪は全て細かい三つ編み

にして後ろに流している。

タランテは気怠げだった。ちら、とあたしの足元のソレを見て、嫌そうに顔をしかめる。

「またやったのね」  
溜め息。

「魔王様を侮辱した罪は重い。例外なく半殺すことにしてるから」  
ボロボロのソレを背後から持ち上げて、床に傷が付かないように配慮しながら中に入る。

治療院の中は薄暗く、魔物の力の元になる高濃度の障気に満ちている。水棲の魔物なら水槽に、土製なら穴に、魔人ならベッドに寝かせて回復を待つ。

「今回は吸血鬼、ねえ」

ベッドにソレを寝かせると、タランテは物憂げに呟いた。

「シエリーメイ、あんたモテすぎ」

タランテはいつもあたしをからかう。それも唐突に。意味が分からないからあたしは何も言わずに首を傾げるしかない。

タランテは古参で、あたしより長く魔王様にお仕えしているから、あたしもユードイツの時のようには好き勝手に叫ばないようにしてるのだ。

「分かりません、て顔ね」

頷く。と、タランテがいらっときたのが分かった。三つ編みが一本、猫の尾のように持ち上がったのだ。

「タランテ？」

あたしは怯えた。

タランテはふふふ…と妖艶に笑い始める。  
怖い。

「シエリーメイ。私、さつき振られたのよ」

「ひ。え、タランテは美人なのに！」

思わず悲鳴が漏れた。

「そんなの関係ないそうよ。男はみんな清楚可憐がイイんだと。例

えば風になびくフワフワの金髪。真っ白ですべすべな肌の」  
ちなみにあたしの髪は長いウェーブの金で、目は青。肌は城に籠も  
っているせいで比較的白かった。

「でも、エロいのもぐつとくるそうよ？例えばマントからちらりと  
覗く太ももとか」

あたしは多分顔面蒼白だった。あたしの服は凄まじく露出度が高い。  
そういうものだから仕方がないと言われたのだ。それはもう人魚に  
鱗があるのと同じように。けれど魔王様の側近の証の赤いマントは  
長いから、ほとんど隠れて見苦しくないはずなのに。

ちらりつて、何！？

タランテの髪は全てが半分程宙に浮いて、内の一本にだけがつつす  
らと蛇の顔が浮き出ていた。赤い舌がちろ、と泳いだ。

「タランテ！あ、あたし、今すぐ魔王様の所に行かないと！！」

じゃあ！！

叫んで、後ろを見ずに走った。そんなあたしを、タランテの声が突  
き刺した。

「この清纯系淫魔が！顔と服装が会わなすぎるのよ！」

タランテ酷い。気にしてるのに！！

でも、振り返らない。もし目があってしまったら怖いもの。

誰だって石になりたいくは無いものだし、機嫌の悪いタランテには近  
寄ってはいけなかったのだ。

あたしは魔王様の側近B。

魔王様の女と言われて怒るのは、あたしが淫魔だからなのだ。

## 側近 B と焼菓子

あたしは魔王様の側近 B。側近であって妾ではない。もしも魔王様の女と呼ぶなら半殺すことに決めている。

なので、ここのところあたしは自室に籠もっていた。魔王様のお召しが無制限りは城内を出歩かないようにしている。

だってもし NGワードをふっかけてくる阿呆に出会ったら、勝手に体が動いて半殺しにしてしまう。最近石柱の廊下に穴をあけたり、中庭を荒らして景観を損なわせたりと阿呆の移動に失敗しっぱなしなので、これ以上は自重してるのだ。

前回タランテから逃げた後、「そっいえば中庭が」とまたユーディットに修復を促されたのだ。

このまま修復係が定着したらますます側近 B と呼ばれなくなってしまうに違いない。

鬱だ。

コンコン、とドアのノックの音があたしを呼んだ。誰がいるかは気配で分かる。

「ユーディット。開けていいよ、なに？」

「うん。メイ、お願いがあるんだけどちょっと良いかな？」

扉から顔を覗かせるユーディット。いつものようにゆったりした笑みを顔に乗せている。

あたしはだらけていたベッドから立ち上がり、テーブルの椅子を引いてユーディットを促した。

「はい」

「ありがとう」

音を立てずに席につく。

あたしはティーセットに手を出して、温かい紅茶をいれて出した。

お茶請けには昨日暇つぶしに作った金属植のクッキーを添える。

ユーディットはうきうきした様子でそれに手を伸ばし、パリポキと食べ始めた。

「ユーディット」

「う？」

口にものを入れたまま返事してほしくないのだけれど。あたしが顔をしかめると、気づいたのかお茶を飲んで流し込んだ。

「ん。何？」

「用件は？まさか大した用も無いのに、また魔王様をお1人にしたんじゃないでしょうね？」

こここのところ鬱々としていた気分が鎌首をもたげた。目の前にいるのが手を出しても全く問題のないユーディット、というのが大きな原因だと思う。

側近でありながら魔王様の近衛隊のグランドピース一ノ駒であり、高位ダンジョンを3つ管理している。ようするに最強なのだ。

あたしも側近と兼任で高位ダンジョンを持ってはいるけど、数は1つ。場所も隠されたボーナスステージ風だから結構暇で、規模も小さい。

まあ、あたしには養う一族も居ないし部下も極小だから不満は全く無いけれど。ただ周りに舐められるだけで。

そんなあたしがユーディットに喧嘩を売っても、周りにはさっぱり気にされない。

「…なんかさらに鬱になってきた」

ふう、ため息をついた。

ユーディットはあたしの問いかけに答えず次々とクッキーを食べている。あたしが考え事をしている間は食べても良いと思ったらしい。金属植を細かく割って混ぜたクッキーは、腹持ちが良くて保存も効く。味付けは自然な甘さに抑えてあり、金属植のパリパリ食感が食べられて口に残りやすいのだ。鉄やミネラルが含まれているので魔族的には栄養満点でもある。

ユーディットの好物のひとつなのは知っているので、頬杖をついて食べ終わるのを待った。

たちまち、皿に盛ったクッキーは姿を消していく。そう勢い良く食べてもらえると作り手としては悪い気もしない。

「…ふう」

ユーディットはため息をついた。満たされた顔をして、前のめりだった体を戻したので、お茶を入れ替えてやる。

差し出すと、くーっと飲みほした。

「ごちそうさま。メイのクッキーは本当においしいよ」

につきり一言。確かに、一山あったものを食べ尽くしたのだから説得力がある。

「ありがとう」

誉められたのだから一応お礼を言う。

すると、ユーディットは今思い出したという顔をして、ぽん、と両手を打った。

「お願いってこのクッキーのことなんだ」

とようやく仕事の話始めた。

「ダンジョンの工事に行ってるドワーフ達からね、どうしてもメイのクッキーが食べたいってリクエストがあつたんだ」

「あたしの？ クッキーくらい調理房でも作ってくれるはずだけど」

「そうだけど、彼らに丁度良い金属植の種類や含有量はメイのが知ってるでしょ？」

まあ、薬品や金属やらをいじるのも趣味の内なので。

不本意ながら頷く。

とはいえ全員分を作ることとは不可能だと思っただけど。それって何体分？

あたしは否定の意味を込めて首を振った。

だいたい趣味で作った菓子に期待をされても困る。あたしは調理人じゃない。魔王様の側近Bなのだ。

「それに魔王様も今日のおやつに食べたいって」

「すぐ用意するわ！」

ぐだぐだした思考は吹っ飛んだ。

魔王様があたしのクツキーをご所望なのだ！それ以外は全て些細なことに過ぎない。

喜び勇んで部屋を出ようとすると、ユーディットが物欲しそうな声で

「ついでに」

と自分の分を催促しそうだったので、

「それは嫌」

とぶった切ってやる。

すっとした気分嬉しくなって、あたしの足取りは軽かった。

あたしは魔王様の側近B。魔王様のためなら多少の苦勞も面倒もど  
うだっていいのだ！

## 側近Bと魅了眼

あたしは魔王様の側近B。

メイの欠点は夢中になると周りが見えなくなることだよね、とは側近Aの言葉である。

あたしはふと気がつくと、山と積み上がった焼きたてほかほかのクッキーの前で高笑いをしていた。

両手を腰に当て、料理房の高い天井に届きそうなくらいのそれを見上げたまま。

ぼかん、とあたしは大口をあけて呆ける。

「え……？」

訳が分からず、周囲を見渡すと、料理房は死屍累々の大変な事になっていた。

さらに視野を広げれば、隅の方に縮こまって震えているリザードマンがいた。大きく筋肉質な体はまったく隠れていないけれど、腕で頭を覆って丸くなっている。

「アキツシュ？」

近寄りながら声をかけると、びくうと体をひきつらせる。赤い髪と赤い尻尾が、ぴ、と一瞬跳ねた。

「…大丈夫？」

宥めるようになるべく優しい声を出してみたのだが、やはりアキツシュはただただ震えて横に何度も首を振っている。

どうやらよほどの事があつたらしい。

あたしは首を傾げた。

とそこへ、別の気配が近づいてきた。今までどこにいたのやら、この調理房の主、料理長だ。

「スフィロク」

ミノタウロスのスフィロクは、料理長として包丁をふるっている。彼にかかれれば斬れない材料はなく、包丁裁きは目を見張るほどの正確さ。

攻撃力も高く、グラントピースの三ノ駒に就いている。ついでに言う二ノ駒は先日のタランテだ。

メデューサのタランテが挑戦者を石にして、ミノタウロスのスフィロクが武器兼用の包丁で切り刻む。という流れになっている。

戦闘中はまさに怒り狂う雄牛のようなスフィロクだが、普段は大人しそうな細い青年の姿をしていた。焦げ茶色の髪で顔の半分を覆い、一つしかない目を隠している。

ユーディットの笑顔・タランテの眼鏡・スフィロクの前髪は三大「中身を見てはいけないもの」として裏で名を連ねている。

各所を騒がす暴れ者だったアキツシュがスフィロクのそれを見て、すっかり丸くなった話は悦話として知られている。

そんなスフィロクは、あたしの呼びかけに非常にゆっくりとした動作で顔をあげた。それがあまりにも青く、力ないものだったのでびっくりした。

普段は日溜まりのように朗らかに笑う人なのに。

「どうしたの!？」

思わず叫んで近寄ると、スフィロクは青い顔のまま

「メイちゃん」

と息を漏らした。

「正気に返ってくれて本当に良かった。

メイちゃん…無理をしたらいけないよ。俺でよければ何だって聞くから。ね？」

今までで一番真剣な目で、あたしが少なくとも十回は頷くまで、こうして諭されたのだった。

スフィロクの説明によれば、ご飯時で料理を取りに来ている魔物が

沢山居る中にあたしが現れたので、何人かの阿呆が絡んできたらしい。

けれどもどこかおかしい様子のあたしは全く取り合わず、魔王様の女、と言いかけた奴の口を片手で塞いで持ち上げたという。

もがもが言つて暴れるそれを全く気にせず、あたしはスフィロクに「クツキーを作るの」とろけるような最高の笑顔で言った。そして、

「でも困ったわ、材料が足りないなんて」

「クツキーができないと魔王様がお嘆きになる。そうしたら、わたし」

そこで涙を溜めて、崩れるように床に座り込み

「誰か、助けてくれないかしら……」

居並ぶ者共を泣き濡れた顔で仰ぎ見て、哀願したという。

チャームアイの発動だ。

そこからはもう、ありとあらゆる所から我先にと材料を用意する者共、手伝いを申し出て限界まで酷使される者共、生命力を絞り出されてクツキーの隠し調味料に使用されて床に沈む者共、とトントン拍子に屍が積み上げられていったらしい。

スフィロクはなんとか無事だったがアキツシュは魅惑にかかり、延々クツキーを焼くために炎を吐き出し続けたのだという。

あたしはもはや何も言うことができなくて、ごめんなさいとスフィロクに頭を下げた。

あたしは魔王様の側近B。

実はチャームアイなんてものが使えてしまつらしい。

## 側近Bと墮天使

あたしは魔王様の側近B。

あんたは間が抜けすぎなのよこの天然！とは、麗しの例の人の言葉である。

山盛りのクッキーは無事にダンジョンのドワーフに届けられたらしい。

ぬるい笑顔のユーディットは、「いっぱいできたねえ」と子供を誉めるような事を言い、チャームアイの騒動についてはあえて何も触れず。そして、明らかに魔王様が召し上がりになるより多めのクッキーを胸に抱えて、「いい？」ときらつきらした顔をあたしに向けた。

あたしには、こわばった笑みのまま「うん」と頷くことしかできなかった。

だがそれでも、クッキーはひと抱え分ほど余った。なので丁度その場にいたアキシシュに勧めようとしたら、怯えてあっという間に逃げられてしまった。スフィロクは優しいので数枚食べてくれて、余っているなら学塔の子供たちに差し入れしてはどうかとアドバイスをくれた。

さすがスフィロク！

「という訳で、子供たちのおやつにでも」

手短かに状況を説明し、はい、と小袋に分けたクッキーを、学塔の責任者サロメルに渡す。小袋の数は人数分と少しある。あまったら適当に食べてしまってもいい。

サロメルはあたしが突然やってきたので目を白黒させて驚いていたが反射のように受け取って、

「あ、ありがとうございますっ」

と慌てた様子で礼を口にした。

サロメルは、手足が細く華奢な少女で、人の年で表すなら16位に見える。黒くまつすぐな髪に大きな瞳も黒。頬は薄く薔薇色に色づいて、唇だけが血のように赤い。可憐な中に妖艶な魅力があつて、あたしはサロメルのような外見こそ淫魔に相応しいよなあ、と思えてならない。

ただしその背にあるのは淫魔の蝙蝠のような羽ではなく、鳥のような翼。その翼の色が黒いので、サロメルを墮天使と呼ぶ人もいる。サロメルは甘いものが大好きなのだけれど、これ以上重くなると飛べなくなるといって、いつも涙を呑んで諦めている。今回もしばらく腕の中の籠を見つめた後、うつすらと涙を浮かべて

「うう、シエリーメイさんのクツキー……」  
と悔しそうに呟いた。

「大丈夫。このクツキーはお菓子というより、保存食だから。サロメルもこれなら食べられるよ」

「本当ですか!?!」

途端にパアアと輝くような笑顔を浮かべて喜ぶ。大きな目に溜まった先ほどの涙がキラキラ輝いてとても可憐だ。

とても、戦闘中の武器が首刳用としか思えない長い鎌には見えな  
いし、広げた羽根から毒の翼矢を飛ばすなんて信じられない。

魔物は見た目に寄らないというけれど、サロメルはまさにそれだ。  
なんせ、こんなに華奢で可憐なのに、サロメルこそがグラントピ  
ース最後の一人。最強の盾、四ノ駒なのだ。

世の不思議に微妙な気持ちになっていると、パタパタと走り寄る  
足音が届く。

「あー!」

「シエリーメイ!」

「シエリーメイだ!」

とたんに賑やかになる。小さい彼らは、学塔の学生たちだ。学塔  
には様々な書物や地図、資料があるから誰でも入ることが出来るが、

大人が働いている時間は小さい彼らの天下だ。

魔族には種族のテリトリーがあつて、一人前になるまでは外に出る機会があまりない。そして、一族の中で育ち城にあがると、一族だけが大事な魔人になつていくことが少なくない。

魔王様とユーディットはそんな状況を憂い、城の傍らに塔を立てた。そして、丁度同じ時期に城のメンバーに加わつたサロメルに任せた。

「こらつ、シエリーメイさんは偉いの。ちゃんと様かさんをつけて言葉の最後にはですますをつけるのよ」

こんな感じでサロメルはいつも頑張っている。

だが、

「ですますー」

「ロメルー先生ですますー」

まあ、だいたいこうなる。

小さな彼らの多くは、吸血一族や竜族の子どもたちだ。生まれたときから自分たちの一族こそが魔王様に次いで高貴であると教え込まれている。淫魔は本来なら吸血一族の使役の使役くらいの下っ端なので、あたしに敬意をもつのは難しいのだろう。

だからあたしは気にしていない。

それに、

「シエリーメイほんとに何しに来たんだ？」

「授業はまだ先だよな」

「シエリーメイのじゅぎょう好きだから別にいいー」

こんなにかわいいのだ。怒る気なんて吹き飛んでしまう。

ありがとうと言いなながら、わらわら集まつてきた彼らの頭を撫でる。

一族が埋め込んだ常識はまだまだ彼らの中に根を張っているけれど、こうして自分で好き嫌いを判断できるまでに成長している。魔王様とユーディットの願いが叶う日は、きっとあと少しだ。

あたしの授業が好きだと言う彼らに怒るに怒れなくなつてしまっ

たらしいサロメルは、むむむと唸りながら仁王立ちをしている。

「サロメル」

「シェリーメイさん…」

困りました、とその顔にハッキリと描いあつて、何だかおかしくなつてしまふ。

「シェリーメイで良いじゃない」

ふふふ、と自然と声もれてしまふ。困った時は発想の逆転を試みればいい、と側近Aも言っていたのだ。

でも、と言ひ募ろつとする唇にすつと指をおく。

「サロメルもあたしをシェリーメイと呼べばいい。敬称無しは親愛の証でしょう？」

にこ、と笑いながら言うつと、サロメルはぼんつと爆笑でもしたかのように真つ赤になつた。

そのままうつとりとした表情で手を伸ばしてきて、あたしの手を取つて絡める。…絡める？

「メイお姉様」

ちがうよ。なんか違つよサロメル！

「あたし…またなんか間違つちやつた？」

「いいえお姉様はいつでも一番正しいです」

「やつぱり違う。帰つてきてサロメル！」

騒がしい私たちを後目に、小さい彼らはクッキーを見つけたようで我先にと飛びついてきやつきやつと喜んでる。

かわいいなあと見てるのは、きつと現実逃避だと思つ。

どこで間違つちやつたんだらうなあ…

あたしは魔王様の側近B。

子どもたちはあれからあたしを「メイ姉」と呼ぶ。

## 側近Bと後始末

あたしは魔王様の側近B。

後始末は下準備より面倒らしい。

ユーディットの依頼から始まったクッキー騒動はようやく終わりを告げた。何故か酷く疲れた気がしたので、スフィロクにお茶を貰おうと調理房に向かっていたところだ。

「メイ」

それを呼び止める…ああ、こういうのをデジャヴって言うらしい。言わずもがなで、あたしを呼び止めたのはユーディットだ。やはり顔にはまったりと薄っぺらい笑みを浮かべている。

あたしには人の心は読めないけれど、何故だかユーディットの次の言葉は分かる。

「メイ、治療院に集合」

ですよね。

自分の不始末、まずは自分で何とかしましょう。

学塔で使われている基本標語だ。喧嘩をしたら、物を壊したら、自分で謝らせることによって事の大きさを理解させるためだという。あたしは学塔の生徒ではないけれど、ユーディットにとってはあまり変わらない。ユーディットはあたしの名付け親であり、教育者でもある。

今回、調理房であれほど多くの魔人を前後不覚にしたのに、何も言っていないからおかしいと思ってたんだ。

まさか時間差攻撃とは。

「クッキー騒動の被害者の治癒？」

うなだれながら聞くとユーディットの笑みはさらに深くなる。

はい、まだあるんですね？

「あと、調理房や各所の修復ね」

「修復？」

チャームアイに罹った被害者たちがなりふり構わず駆けたので、城のあちこちに傷がついたらしい。

確かに、こうして歩いていても分かる。石畳がずれていたり、柱にえぐれた傷がついていたり。

「魔王様の城が傷だらけ。…怒っていらした？」

「むしろ喜んでたよ。イベントみたいに賑やかだった」

「良かった」

ほう、と息をつくとユーディットはぼむとあたしの肩を叩く。

「あの方はそのくらいでどうこうなるような器じゃないよ。まあとりあえず、メイは後始末だね。治療院へ行こうか」

「はい…」

あたしは淫魔だ。とはいえ、本来の淫魔がどういう存在かというのは、よく知らない。

あたしは森で生まれた。その時そばにいた魔王様とユーディットに拾われて、ずっと城で生きている。当時は動くこともままならなかったけれど、ひと月後には走れるように、半年後にはドワーフに混じって城の掃除をできるようになった。やがて戦いを覚え、ダンジョンの主になることを認めていただき。そこを任せる部下ができて、魔王様の側近になることができた。

これがあたしの人生の全てだ。だから、今まで他の淫魔の力を見たことは無い。

だからようするに、何が言いたいのかというと、だ。

「この人たちずっと魅了されっぱなしだったの!？」

治療院の扉をあけた途端、あたしに何かか襲いかかってきた。ユ

ーディットが危なげなく透明な壁を展開して防いでくれないければ、潰れてひらひらになってしたかもしれない。

あたしを襲った者たちは、透明な壁にぶつかっても尚こちらに体を押し付けている。唇がたらこにみたいに変形しているのがとても怖い。

なんなのこの人たち。こぼれおちたあたしの眩きを拾ったユーディットが平然と「魅了中毒」と言ったので、思わずでた言葉が先ほどの第一声になる。

「そうなんだ。気絶から目覚めてもメイにメロメロのままに困ってるんだ。しかも効果が切れかけで辛いらしい。チャームアイにかかりたくて堪らないみたいだよ」

言い切ったユーディットはあたしの腕を後ろからがっしり掴んで離さない。逃がさないよ、という心の声が聞こえてきた。

他の淫魔のことはよく知らないけれど、こんなに魅了が続くものだなんて知らなかった。知っていたら発動を思いとどまっていた…かは分からないが。

「淫魔の魔術は唇か爪先からしか使えない。魅了は眼光でもかけられけど、魅了解除はその二つの方法しかないよ。キスするか爪で切り裂くか、決めてね。

はい、頑張って」

「え、うそ」

ちよっと待って!!

というあたしの声は届かずに、ユーディットは壁を消し去った。途端になだれてくる男たち。

唇か、爪先か？ いやむり悩めない。ごめんね治療はちゃんとするから許してね！

自分の不始末、まずは自分で何とかしよう。でも無理だったら、誰か助けて欲しいです。

## 側近Bと後始末2

いつものまにやらあたしの周囲は魔物でいっぱい。いちにいさんと軽く数えてみると、30体いた。

多勢に無勢って、沢山居るとどうしようもないという意味でしょう？

じりじり包囲の輪が狭まっているのを感じながら、横目でちらりとユーディットを見た。

「どうしたの？ メイ、助けてほしい？」

にやにやにやにや。笑うユーディットは、改めて作った自分用の透明な壁の中で楽しそうにこちらを見てる。

「助ける気なんてないんでしょ？」

「あ、わかる？」

さらさらないよ。

輝くような笑みで言われたあたしはどうしたらいい？

答えは決まっている。周りの阿呆で発散すればいい。

それもこれもすべて、

「あたしを魔王様の女と呼んだのが悪い！あたしは魔王様の側近Bだ！！」

そういうこと。

叫ぶと同時に、両手の人差し指の爪をしゅっと伸ばす。長さは腕と同じほど。ちよっとした剣くらい長さはある。

あたしのやる気にあてられたのか、魔物たちは途端にわっと包囲を縮めた。太い腕があたしに届くその前に、くるん。両手を伸ばして一回転をする。

魔王様から頂いた深紅のマントが舞う向こうで、パツと魔物たちの血がとんだ。広がる血の匂い。マントが動きのままにあたしの体に巻き付いたところ、切られた魔物たちが意識を失って床に沈んだ。

淫魔の魔術は爪か唇。

ユーディットの言う通り。深く切った訳じゃないのにすごい効果だ。

倒れた魔物は5体。あと、25。

魅了状態の魔物たちは、実は、工事の中位ダンジョンの住人たちだ。あたしが生まれる前からダンジョンに暮らし、侵入者を叩いてきた彼らには、戦いが身に染み着いている。

それは意識がない今も有効で、あたしが5体を倒したせいで彼らの闘気が澄んだ。本気になった、のだ。

あたしは中指と薬指の爪も伸ばし、小指を添えた。親指を中指の付け根と手のひらを繋ぐ折り目にたたみ、指を垂直に曲げる。

そのまま、胸の前で両手を重ね合わせる。

これがあたしの、戦いの構え。

「来い！！」

魔物たちの雄叫びがあがった。

最初に近寄ってきたのは長い髪のワーウルフ。あたしは伸びてきた手にそって体を移動し、すれ違いざま肩口を斬りつける。24。

振り返ると2体が詰め寄ってきている。こちらワーウルフ。押さえ込むように飛びかかってきたので、膝を折ってあたしが屈み、頭上を通る時にさっと傷をつける。22。

潰されないように影から転がり出て起き上がると、丁度目の前に吸血鬼。あたしの動きに気づく前に前面を切りつけ、もう片手で手近にいたワーウルフを2体、切る。19。

両腕を伸ばしたせいかわい、と腕を掴まれた。目の前には吸血鬼。くあっと口をあけてあたしの肩に牙を埋めようとしたので、とっさにもう片方の手で払ってしまう。あ、顔に。吸血鬼は顔面に三筋の傷をつけて崩れた。…18。

あらためて周囲を見回すと、始めた時よりも強い目力で見つめられていた。どうやら、少しずつ魅了が抜けてきているらしい。飢餓

感が増したようで、どうにもギラギラしている。

背後に気配を感じたので爪でガードすると、キーンと高い金属音が響く。吸血鬼が腰の剣を抜いたのだ。両手で力を込め、ぐいぐい押しこめる。

さらに何を思ったか唇を突き出してきたので、びっくりして思わず股間を蹴り上げてしまった。吸血鬼はもんどり打って倒れ、床で苦しげに呻く。その腕にさっと傷をつけると静かになった。

「メイ、それはひどいよ……」

ユーディットから哀愁漂う声音で責められた。17。

ひたひたと近寄ってきたのは、ワーウルフが変化した狼。夜色の毛皮と月色の瞳、鋭い牙を剥き出しに、ほうこうを上げる。素早さと力が上がった彼らは強い。

飛びかかってきた影をひとつふたつと避けると、頭上から落ちてくる大きな何か。とっさに避ければ、頑丈な岩ゴーレムがずっと音を立てて腕を床にめり込ませる。

「うわぁ、と嫌そうな声が喉奥から零れる。あたしはぐっと足に力を込め、跳んだ。魔物たちの頭上を飛び越えて、ユーディットの防壁の上に降り立つ。

「どうしたの？ ギブアップ？」

「休憩しにきただけ」

ユーディットはとにかく楽しそうだった。ユーディットが出たらここにいる全員は30秒で倒せてしまう。そんな魔物に苦戦してるあたしが可笑しい、のではなく。

「切り刻んじやえば良いのに。よく切れるメイの爪で、軽傷で済ませようとするから苦労するんだよ？」

あたしの度胸のなさがおかしいのだ。二度と立ち上がれない姿にする覚悟があれば、あたしは苦労せずに勝てるだろう。くるくる回りながら爪を閃かせれば、中位のものたちでは防ぎようがない。

でもそれは、駄目だ。

「魔王様のためのものをあたしが傷つけるなんて、絶対だめ」

言い切るとユーディットから呆れたようなため息が聞こえる。

「いつもはボコボコに潰してるくせに」

ボコボコにする分には良いのだ。魔物は治療院に放っておけばすぐに傷は癒える。けれど腕や足が取れると特別な治療が必要で、もしうつかり首を落としてしまえば、傷に強い吸血鬼ですら死んでしまうのだ。

あたしは少し考えて、自分の爪を折った。

「メイ!？」

ユーディットが焦ったような声を上げる。

けれどそれを無視して、折ったのとは他の爪で、折れたそれを縦に割く。4つに分け、魔物に向かって投げ、1体の岩ゴーレムと吸血鬼、2体の狼に命中。彼らはぱたりと床に臥した。

「あと13」

小さく呟くと、急に体が沈む。なに!？ と周りを見渡すと、ユーディットの腕の中だ。頭上にいたあたしを、壁の中に引っ張り込んでほしい。

珍しく焦った顔をして、あたしの折れた爪の手を掴んだ。

爪からは、ゆっくりと血がこぼれ落ちている。赤黒い珠が指を伝い、腕に筋を作っている。その一本がユーディットの手を汚す。

大して痛いものでもない。なのにユーディットはそれを見て顔を歪めた。

そして、半眼になって爪に触れる。ちくりと痛みが走ったが、血は一瞬で止まっていて、折れた傷口も滑らかに治っていた。治療魔法だ。

魔物に効く治癒魔法は人間向けのそれより遥かに複雑で、少なくとも城ではユーディットしか使うことができない。

それをこの程度のことだ。と思ったが、考えてみればあたしも自分の部下が傷だらけだった時はあまり考えずに精気を分けていた。文句を言うべきじゃない。

「ありがとう」

でも過保護だとは思っているので、あたしは微妙な顔になったと思う。ユーディットは顔をそらし、あたしを持ち上げてまた壁の上に戻した。

ユーディットはあたしが自分に傷を作るのは嫌らしい。けれど降り立って魔物たちに軽傷を負わせるには、あたしと魔物たちの強さは近かった。

どうしようか、と悩んでいると、ふと腕の血が目に入った。

「ユーディット」

思いついたそれが正解か、自信がなかったのでユーディットを呼んだ。ユーディットは何？　と言いながらこちらを見上げる。

「淫魔の爪は、血で出来ている？」

ユーディットは一瞬ぼかんと呆けてから、にやりと口角を上げた。

「正解」

それから歌うように告げる。

「表面は血を固め、内は血が流れる。血は魔力を含み、爪は力そのもの。失えば死ぬかもしれない」

最後の一言は、こっそりと告げられた。そういうことは早めにつて、と思うあたしは間違っているのだろうか。

「爪は大事なものなんだよ。だからメイは感謝しなくちゃね」  
くすくす、笑う。

ユーディットはいつもあたしで遊ぶのだけど、命がけなのはひどいと思う。ユーディットがあんなにも慌てたのは、あたしが自分の命を危機にさらしたからなのだ。

あたしは懐から自分用のクッキーを取り出した。数は5枚。それに、腕から流れていた血を浸す。

ユーディットが勿体ないとかなんとか言ったが、もう、知らない。13になるように適当に砕くと、あたしはそれを一つずつ、魔物たちの口めがけて放り込んでいった。それが魅了をかけたあたしの血

だからか、魔物たちは自ら口をあけてクッキーを迎え入れ、ぱたぱたと倒れていく。

平和だ。

クッキーに始まりクッキーに終わる。随分高くついた騒動だったな、とあたしは疲れたため息をつく。

「ユーディット。あたし、もう、魔王様にしかクッキーは焼かないことにするわ」

そんな！？ と上がる悲鳴が唯一のなぐさめだった。

## 側近Bと勇者他1

あたしが魔王様に忠誠を誓うことを、おかしいと、不自然と言う魔族がいる。

あたしが淫魔だから。

淫魔が強い男の人の前にいる時、そのひとが“ほしくてたまらなく”なるものだ。だから本来なら身の回りの世話なんかしない。城内の手入れも、幹部とのつなぎも、しない。ただ魔王様の寝所の奥の奥に家具として存在して然るべき、と。

魔王様が望めば他の男から精気を集め、魔王様に捧げて。意志も心も持たず、ただ、ただ道具のように。

「まあ、お前のような役立たず、魔王の役には立たなからう。道具としてすら不具合だろうが、我が引き取ってやっても好いが？」  
含んだ笑みを浮かべてその魔族があたしの頬に触れた時。

それは確か、あたしが生まれてまだ半年。初めて殺してやりたいと思った、記念すべき相手。

「という訳で、それからは出会う度に原型無くすまでへこませてるんだ」

場所はいつもの治療院。の、すぐそばの廊下を挟んだ中庭で。ささやかな風が草木を揺らす爽やかな空気の中、白いテーブルセットを広げてお茶をしている。

メンバーはあたしと、メデューサのタランテ。それと、ミノタウロスの料理長、スフィロク。

「そんなこともあったわね」

とティーカップに口をつけるタランテを、スフィロクは何とも言い難い表情で見ている。

「メイちゃんと乱暴なことは、似合わないよ。タランテ、君は止めるべきだ」

悲痛な表情で訴えるが、タランテの心には届かない。どころか、お茶請けのケーキも紅茶もしっかり飲み込んでから、ぷっ、と吹き出してにやりと笑う。

「あんたに言われたらいくらメイだって憐れね」

訳すと、普段は誰よりも理性的で大人しく良心の塊のようなスフィロクも、戦闘時間は恐ろしい、身の毛もよだつような力を見せるから、人のことはいえない、と。

タランテはいつだって棘のある言動をする。言ってることは正確なのに、相手に理解する余裕を与えない感じ。狙ってやってるんだけど、なんだかなあ、とあたしは思う。

「君はどうしてそうメイちゃんに冷たいことを言うんだ」

ほら、伝わってない。あたしの事はあたしの好きにさせるのが良い、という意味なのに。

スフィロクが乗ってきて、タランテはとても良い笑顔（獲物を目の前にして舌舐めずりする蛇のような）で、

「嫌いだからに決まってるじゃない」

なんて言っちゃう。これも多分、何を嫌いか、をハッキリさせれば何の問題もないような言葉なのだろう。

でもそんなの、頭に血が登りつつあるスフィロクには分からない。冷静ならひっかからないけれど、相手がタランテで、ネタが年下でスフィロク的には“女の子”なあたしで、場所が平和なお茶会で、昼過ぎだからしばらく仕事もないし、誰にも迷惑がかからない。こー一番では誰よりも冷静なスフィロクだけど、優しさゆえに、仲間内でのカツとなりやすさは飛び抜けている。

「撤回しろ！」

バンツ、とテーブルを叩いて立ち上がる。食器がカタカタ揺れるが、まだ無事だ。

「あら、やる？」

優雅にカップを持ちながら、口元をつりあげるタランテ。ほんといい笑顔。

スフィロクもタランテも、二の駒と三の駒だから、手合わせするのに文句はない。有事には連携プレーをとることも多いのだから、お互いの手札や、呼吸を知るためにとても良いことだと思う。魔王様のお役に立つことだ。

でも、食器を壊すのは別。

もちろん城も庭も壊すの厳禁。

「……………」

だから無言でタランテをじいつと見る。

最初はこのまま暴れようと思っていたに違いないタランテは、あたしの訴えにふいと顔をそらし、立ち上がる。

はい、とあたしにカップを投げると

「森」

と低い声で呟いて、顎で中庭の壁の向こうを示し、トン、と軽い音と共に跳躍し、見えなくなった。

「お茶、ありがとう」

スフィロクも低い声で囁くように告げて、後に消える。ふと足元を見ると、スフィロクが踏み切った場所に蹄のような跡がくつきりと残っていて、本性のミノタウロスに戻りかけていることが分かる。きつと森について喧嘩が始まるころには、完全に変化しているのだろう。

タランテはそれを見て、満足げに微笑むにちがいない。

「スフィロクが“安心して”怒れる相手なんて、あんまりいないしね……」

おもわずほほ笑む。テーブルの上に乗っている皿の上で、まだケークが残っているのは食べきれなかったあたしの皿だけ。スフィロクもタランテも、きっちり完食して、お茶もすべて飲み干してくれていて、作って用意したあたしのことを忘れずに思いやってくれたことが分かる。優しいのだ、二人とも。

誰もいなくなったので、お茶会はお開きになった。

皿を一枚一枚重ねて片づけ、ティーブルクロスを畳み、椅子とテーブルを解体して専用の箱に詰めて、治療院の中の棚に戻す。タランテは自分の楽しみに関係ない所で無駄な労力を使うことがとても嫌いだ。だから自然と、お茶会は治療院のすぐ側で開くようになった。時々甘い臭いをかぎつけた患者たちが、それこそゾンビの様な足取りで近づいて参加を希望する事もあるけれど、彼らがお茶を飲めるか治療院に逆戻りさせられるかは、すべてタランテの好感度にかかっている。今の所、8割弱が逆戻りコースをたどっているのだけだ。

あたしは自分の食べ残したお皿を前に、苦笑を浮かべた。

作る時にケーキを味見したせいで、食べきれなかったのだ。捨てるのはもつたいたないし、かといって、食べきることは難しい。どうしようかと食べかけのケーキをじっと睨んで考えていると、

ひよい、と黒くて細い手がそれを浚っていった。

驚いて見ると、もぐもぐと口いっぱい頬張って食べているそいつは、

「ぐふう！？？」

あたしにいつもいつもいつも喧嘩を吹っ掛けてくる、最初にあたしが殺意を持った相手である、吸血一族の頭領の次男だった。

なぜか、頬張った口元を押さえて、うめきながら床をゴロゴロと転がっている。

さつき原型無くすまでへこめて治療院に放り込んだのに、なんて回復が早いんだろう。もうそこまで元気になったのか、一体何を遊んでいるのだろうとその男を良く見てみたら、顔色が土気色だった。どうやら、ケーキが喉に詰まってしまつて呼吸が苦しいらしい。

やがてなんとか呑み込んだらしく、盛大に咳き込みながら、ゆっくりと立ち上がってこちらを見た。

「おい女！！ 喉に詰まったではないか！！ 高貴なる我にこのよ  
うなことをして良いと思っっているのか！」

「勝手に人のものを食べといて、どこが高貴と？」

はっ、と鼻で笑って冷笑を浮かべてやると、次男は青筋を立てて  
怒りだした。

「私の腹に全力の突きをかましておいて、しらばっくれる気か！！」

え？ と思っって自分の手を見ると、確かに腕を突きだした状態で  
固まっていた。そういえば、柔らかいものを思い切り殴った感触も  
残っている。ああ、あまりにも嫌いすぎて、腕が反射的に攻撃を加  
えたらしい。

「ああ、あたしの腕、良い仕事したね！！」

「誉めるな！！」

だっって嫌いなものは嫌いなのだ。この次男は、なぜかあたしより  
も弱い。それなのに、なにかにつけて嫌がらせをしてくるから、つ  
いつい殴り倒してしまう。でも魔王様もユーディットも良いって言  
ったし、問題ないんだ。

「女、お前は確か魔王の側近を謳っていたな。この無礼、魔王の側  
近の行いとして我が長に報告させてもらおう」

にやりと悪辣な笑みを浮かべる吸血鬼。こいつは、そう言えばあ  
たしがうるたえて謝ると思っっているのだ。魔王様を盾にするなんて、  
なんて下劣な男なのだろう。

うん、ちょうど良いから、この機会に完膚無きまでに潰してしま  
え。

あたしはにつこりと会心の笑顔を浮かべて、言った。

「この間ユーディットから聞いたんだけど、頭を強く打つと、記憶  
っって消えるんだって」

うふふ、と高くて柔らかい笑い声が自然と喉から漏れてきた。

そのまま両手の骨をボキボキ鳴らして、次男に近づく。祈るよう  
に重ねた両手を頭上に掲げて、全力を込めて振りおろせば、細い吸  
血鬼は頭から石柱の廊下に沈み込むに違いない。その後は、上から

踏みつぶして治療院に長期間拘束されてしまえばいいんだ。

あたしの目の奥に宿る唯ならない感情を見たのか、吸血鬼は急にうろたえだして、一步、二歩と後ろに下がる。顔の前で手を横に振って、

「いや、まで、……こつちへ来るな！」  
と叫ぶ。

「ふふ……。今更、遅い。その頭、二度と首につくと思うな!!」  
あたしがぐあ、と腕を振り上げると、吸血鬼が両手で顔を覆ってしゃがみ込むのと、それは同時だった。

ジリリリリリリリ

はっとして、手を振りほどく。

「な……。なんだ？ この煩い音は??」

吸血鬼はそつと顔をあげて周囲を見回しながらとぼけた事を言う。  
このベルの音は、魔王城の門番である、三つ首頭のケルベロスが敗北して侵入者を許してしまった時の警戒音。魔王城に住む者は皆知っている。この音が聞こえたら、非戦闘員は扉を固く閉じて、奥にじつと身を潜めなければならない。

グランドピースは配置について、各々武器を手に取り、侵入者を勇者を迎えなければならないのだ。

それなのに、初戦のタランテとスフィロクがない。

どうしよう。これは、紛れもなく非常事態だ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1176m/>

---

魔王様の側近B

2011年10月6日04時04分発行